

仏誕習俗の比較民俗論

片 茂 永

Abstract

In this study of Buddha's Birthday, which is held in Korea and Japan, I made a comparative analysis of some Buddhistic rites, particularly the Lantern Festival of Korea and the Hanamachuri of Japan. Korea and Japan, in spite of their commonalities in Buddhism, Confucianism, and folkloric culture, celebrate Buddha's Birthday in two very different ways. And, I concluded that some dissimilarities between two regions or cultural transformations have its origins in different processes of localization of foreign cultures.

Analyzing the localization of imported cultures provides an important opportunity for me to better understand not only the ethnic identity of groups of people living in East Asia, but also the correlation between localization and globalization in intercultural situations. Mutual relations like these might be called "glocalization".

Buddha's Birthday, as an example of imported culture, and the Lantern and Hanamachuri, as an example of native culture, are the main foci of this paper.

1. 研究の方向

予てから藤井正雄は、国際とか仏教民俗とかのキーコンセプトを盛り込んだ所謂 '国際仏教民俗学' を提唱したことがある¹⁾。民俗学にて仏教民俗論が可能だという前提や確信があったようだが、特に仏教文化圏に属している国々の文化的正体を浮き彫りにするためにも藤井の説は妥当と言わざるをえない。それで国際仏教民俗学はそういう当為性と藤井の持論に基づいていると思われる。さて、その当為性となると韓国民俗学も賛同せざるをえない立場にあることはいうまでもない。用語使用の上では多少異なるにしても、1930年代の朝鮮民俗学の崔南善も仏教儀礼に関する幾つかの分析概念と東アジア文化圏との相互関係を問題提起したことがある。仏教という外来文化がもたらす一定の尺度の魅力と効果を見抜いたからには

かならないだろう。

言い換えれば、仏教民俗は、その比較基準がわりあい公平であり、また広範囲に広がって暮らす東アジアの人々の精神世界を照らし合わせるにも便利なのである。また仏教文化圏に属した国々なら近似資料を確保することもかなり克服されるから偏差の少ない研究も可能になるわけである。

一方、比較の問題に関しては崔仁鶴の次のような言説に注目しなければならない。崔は「未来を指向する比較民俗学」のなかで、これからは近似文化や異文化との相違点の原因究明こそが私たちが目指すべき比較民俗学の課題だと言ったことがある²⁾。多分、伝播や受容に拘って来た一部の研究態度への反省の声かもしれない。多種多様な多文化のなかで特にある文化の正体—identity—を客観的資料や研究条件の上で照会するためには差異の原因究明は不可欠だと痛感せざるをえない。

さて、比較という研究方法ではその基準問題を考えざるを得ないのが筆者の所見であるが、例えば、類似の民俗現象といってもまずはそれを成す要素一つ一つから比較すべきだという立場なのである。民俗現象の置かれた状況はいつも等しくはなく、したがってその民俗現象はトータルに比較されるのが簡単には許されない。それで、一つ一つの要素の研究蓄積は自ずとある民俗現象の全貌を把握する前提条件に繋がると思っている。つまり、この小論で取り上げる仏誕習俗においてもそれをなす要素はいくつもあるし、私はその要素としてお釈迦様の降誕という出来事を人々はどのような形で具現しようとしたのかという一面から探ってみたかったのである。言い換えれば、人々の生活の場で仏誕という出来事は具体的にどのようにして生活の一部になってくるのかである。それを誕生仏・降臨・標・燈・花といったキーワードから考察してみたい。

2. 韓国の仏誕習俗と燈

釈迦の誕生日のことを韓国では四月初八日とよく呼んでいる。もちろんこの他にもある。例えば、燃燈会・燃燈大会・燃燈行事・仏誕日・浴仏会・灌仏会・仏生会・竜華会・降誕会などがあり、また最近では赤子仏陀誕辰日・仏陀様降臨の日・奉祝記念日などがよく使われる。つまり、以前は文献に伝わる表現をそのまま言い伝えるかのように広がった言葉が主をなしていたものの、最近では徐々にではあるが、社会が恣意的に受け止めたり解釈して使う造語が目立つ。しかしいくら何でも過去と現在を繋ぐ一つのキーワードは〈燃燈〉なのである。したがって韓国人ならだれもが燃燈という単語からはすぐに仏誕日を連想するに決まっている。これが今を生きる韓国人の平均的な共感と言えよう。

もう少し具体的に仏誕日の現在のキーワードを探してみよう。燃燈大会・燃燈祝祭・提灯行列・奉祝委員会・奉祝イメージ統一作業・奉祝行事・赤子仏陀キャラクター等がまず考え

られよう。これには近年新たに登場した言葉も含まれてあるが、昨今の韓国の仏誕日を理解する上では欠かせないから注意を要する場合が実に多い。ところが、そういった新旧分析概念の生滅にもかかわらず相変わらず一つの不変の分析概念でありながらキーワードがあるとすればそれも燃燈—*yeondeung*—に決まっている。そういう意味で燃燈はいま韓国仏教民俗の伝承を論ずるには掛け替えのない試金石であり分析概念なのである。さて、南方仏教系統の国ぐにて行われるウェーサク—*vesak*—祭にも提灯とかは登場するが、それはあくまでも教学の燈供養の枠を脱しないことから、いま韓国の燈とウェーサク祭の燈とは根本からその意味が異なる。

とにかく仏誕と燃燈との独特な相互関係の成立は韓国の民俗的系譜から生まれた興味深い問題である。そもそも、その文化的系譜の異なる二つが一緒になってそれから伝承にまで至ったのは韓国の文化的土台の上で説明しなければならない。言い換えれば、仏誕という同一の文化種子は国ごとに異なる便乗の対象と方法を選んできたといえるが、それが韓国の場合は伝来の火や燈の民俗との接触に頼ってきたのではないかという仮説から出発する³⁾。

朝鮮時代の『京都雑志』『洸陽歳時記』『東国歳時記』等には、仏誕日の四月初八日に竿の天辺に燈を掲げたり提灯を点したりした昔の光景がよく描かれている。竿には幾つかの装飾も掛けられていたが、それは雉の羽とか色とりどりの布切れ、松の葉っぱなどで多分に伝来の信仰上の意味があったと言われる中、降臨する仏神が乗り移る標識として考えられた。つまり、これに降臨の標として燈が加わったわけだが、燈が加わることによって仏神は間違いなく我が家とか我が村に降臨してくれるだろうという信仰上の念願や確信が反映されていたと思う。というわけで、肝心の燈の種類も実に多く、蓮燈・西瓜燈・大蒜燈等の植物燈がある一方、獅子燈・虎燈・亀燈・鹿燈・鯉燈・鼈燈等の動物燈もあった。さて、こんなに多様な燈はその系譜が根深いだけにいまも変わっておらず却ってその種類が増える一方である。

江原道春川市三雲寺の仏誕儀礼の場合も例外ではないが、1993年の筆者の調査資料を紹介してみたい。その大略をみれば次のとおりである。まず、竜燈・象燈・鳳凰燈・蓮燈・333人燈・太極燈・鐘燈・地凶燈・塔燈・国旗燈などがある。燈それ自体とともに燈による祈願内容もとても恣意的で流行的である。それで献燈仏事、即ち献燈による願掛けの内容や靈驗あらたかな燈との関係が詳細に伝わる。例えば、象燈は健康や入学試験によく利くと言われるほか、竜燈は世帯主や事業家の事業繁盛と裁判の勝訴によく利くという。また鳳凰燈は男女の縁を結んでくれたりまた不妊治療にもよくきくと信じられる。さらに国家試験にも利くと知られているが、これがどういう根拠に支えられているのかは定かでない。さて、塔燈一つなら以上の効験を合わせた力があり、特に軍人にとっては將軍への進級にも特効があるというからその信仰層の人々がだれかを推し量ることは難しくない。要するに、塔燈一つはその効験と規模から考える限り庶民のだれもが簡単に出来る費用ではなさそうだ。

ところが、次のような特別な願掛けなら鐘燈か国旗燈を献ずるがよいとされる。例えば政

界への進出を望む人がそうであるが、国会議員や地方自治体の市議員選挙のたびに勧められる。この他にも33人燈や333人燈があり、青紗草籠という提灯もある。33人燈と333人燈は各々33人と333人が願掛けを合心して一つの献燈を行うものだと言われるし、青紗草籠は結婚・還暦祝い・出産・誕生日・引越し・褒賞などの家庭の祝い事に勧められる。さらに、いまだ仏教に帰依していない人のためには鐘燈が良いといわれるから三雲寺はいま燈をとおして人の願掛けを万遍なく対応する勢いである。つまり、三雲寺の思惑通りなら人の願望を過えてくれる一番の特効薬として燃燈以上のものはない。さて、太古宗の‘ワールドカップ誘致祈願10万観燈法会’になると献燈にすぎず韓国人の信仰心がどれほどのものなのか理解できるだろう⁴⁾。

さらにここ数年は、ソウルの‘奉祝委員会’が中心になった全国的で大規模な燃燈大法会・燃燈大会などが開催されるなど多くの人々が興奮の渦に巻き込まれている。‘奉祝委員会’とは仏誕日を迎え関連法会や行事を掌るための全国規模の委員会のことを指しているのも、まるで高麗時代の‘燃燈都監’の現代版のようである。奉祝委員会は韓国仏教宗団協議会の26個宗団から構成されており、1998年5月現在の委員長は曹溪宗の総務院長であった。これで形態上では仏誕にまつわるすべての行事が一旦は単一組織によって乱れなく行われることが示されているが、この体制がどこまで貫かれていくかは定かでない。とにかく、奉祝委員会が企画したとされる行事を紹介してみよう。主に1998年と1999年の場合である。

燃燈行列・エギ峰 op 点燈式・その他13ヶ所 op 点燈式・ソウル市庁前燃燈点燈式・伝統燈再現式などがある。

まず燃燈行列は奉祝委員会にとっていちばん準備に忙しい大行事である。大勢の人々が仏誕日の象徴だと信じてやまない灯籠を一つずつ手提げてソウルの中心街を行進したり、その他さまざまな造形物や模型物などが加わった各種パレードが街のあっちこっちで繰り広げられるからである。曹溪寺から公開された奉祝行事案内によると、燃燈行列は1998年4月26日(新暦)の場合午後7時から9時まで行われる予定だった。行列の進行コースは、ソウルの東大門運動場からタッコル公園と鐘閣を経て曹溪寺へ至る予定だったので、通るだけで2時間は予想されていた⁵⁾。いまのソウルで交通統制が認められる大したパレードだったわけである。1993年の場合、ソウルのヨイド広場からアヒョン交差点を経て曹溪寺へと繋がるパレードが4時間30分かかっていたことに比べると大分縮小されてはいる⁶⁾。

動員された人数や規模は行列の大略から推し量ることができよう。先頭から紹介してみたい。一番の先頭は子供会の合奏団が立ち、その次からは子供会の踊り一摩耶夫人一大乗仏者会一合唱団一青年会の農楽一象の模型物一信徒会バラ演奏一信徒会僧舞一仏陀の模型物一十大弟子一108羅漢一傘下団体及び一般信徒一学生会の農楽の順だった。したがって、これぐらいの大々的なパレードを準備するためには当該年度の奉祝行事が終わってからすぐに次年度行事の準備に取り組みなければならなかったと思う。大勢が参加する問題だけではなく、交

通統制に対する不満の声も多かったろうと思うがいまだ周辺の寛大さが存在する。長い歴史からの暗黙だと私は考えている。

とにかく、燃燈にまつわるお祭り騒ぎはソウルに止まらず全国どこも大同小異だった。さてこれによる社会問題の一つに火事がある。火事の懸念は朝鮮時代の『朝鮮王朝実録』にも載っているほどであり、最近もほとんど変わってない。例えば、消防当局は毎年仏誕日の前後数日間は火災特別非常勤務に突入すると言われるなか、ソウル市行政資料室が公開した市政主要日誌によれば、消防署長の非常勤務とか大型寺刹43カ所に消防官の固定配置などが記録されている⁷⁾。それから、事前安全点検としてはソウルの寺と庵子の979カ所に、燃燈の電源自動遮断機設置の勧誘と消防施設正常作動如何と使用法指導等も記録されていた。そして1999年度の場合も、全羅道靈岩郡消防署は仏誕日の前後に管内主要寺刹に対し特別消防点検を実施したことがある。燃燈のお祭り騒ぎによった火事の発生要因が増えたからにはほかならない⁸⁾。つまり、特に仏誕日を迎えて火事を懸念するのは最南端の済州島においても変わらないほど火災の全国的な緊張要因でもあったことが分かる⁹⁾。

OP点燈式とは、北朝鮮の人々にも韓国からの仏誕の祝福が伝わるよう国境線の山々に巨大な燈を点して誕生仏の降臨を知らせる行事をいう。それで、燈を点すとともに統一祈願発願文と北韓の人民に送るメッセージを朗読したりするが¹⁰⁾、この行事が定着してからすでに数十年は経っている。国境線に近い軍部隊毎の軍法堂で行われており、なかでも海兵青竜寺はOP点燈式で有名である。1999年度もやはり平和統一祈願と北方にも祝福をという趣旨で‘釈誕節燈塔点燈式’が5月22日午後部隊長と所属部隊員、そして曹溪宗総務院長を始め地域住民ら600名余りが参加したなか金浦エギ峰で執り行われた¹¹⁾。このようにOP点燈式の燈で象徴された誕生仏は南北統一という現代韓国の民族宿願まで引き受けている。

市庁前燃燈点燈式とは、毎年ソウル市庁前の広いロータリの真ん中に立てられた大型の燈の造形物に点す儀礼のことである。1998年度には大型蓮花模様の燃燈点燈式が行われたことがある。シッタールタが生まれるや否や蓮の花が咲いたという謂れに因んだというが、したがって特に蓮花模様の燃燈には確実に誕生仏が降臨してくれるに間違いのないという人々の念願が反映されているものと考えられる。造形物は4月19日設置して4月21日点燈式を行い、5月4日(仏誕日は新暦5月3日だった)まで灯を点したと伝えられる。造形物の形態は奉祝委員会の会議を経て毎年変更するという。1998年度の造形物は韓国造形研究所の作品であり、高さが8.5m、幅は6mだった。そして制作には2カ月間余りの時間が所要された。さて、1998年度のソウル市庁前造形物を特に蓮花模様にした理由について奉祝委員会側からは国難克服の念願もあったと説明したことがあるが、とにかくその相関関係は恣意性から脱してない¹²⁾。つまり、1999年度にも2年連続蓮花造形物を制作することになったが、泥沼の中で奇麗に咲く蓮の花のように経済不況で苦しむ国民の皆さんに明るい希望を提示したかったというのが仏教側の説明だった¹³⁾。

まさに燃燈は、国難克服の先頭に立ち続けてきた韓国仏教の伝統のなかでも断然目立つものがあり、いまでも冷めてない。太古宗が‘ワールドカップ誘致祈願10万観燈法会’を開催したことはすでに紹介したが、実に万病の靈薬のような燃燈の靈験は韓国仏教の宗派とは関係ない。

伝統燈再現式は曹溪宗とソウルの江南区三星洞に位置した報恩寺の伝統燈研究会が主管する。過去、韓国の祖先が使ったとされる燃燈を再現して伝統文化を受け継いだり広げたいのが狙いだという。1998年度には100個余りの伝統燈が再現されたほか、3個の荘嚴燈の制作及び伝統燈の大型化（高さ3 m、幅4 m）に力を注いだ。また伝統燈は研究会員が制作したものを展示するだけでなく、直接人々にその制作に参加してもらえるよう燈制作の体験の場も設けた。まず竹で燈のフレームを作り、これに伝統韓紙を貼りつける。または絵を描いたり、もしくはある紋様に切り出した色紙を貼ったりするプロセスでかなり手間のかかる仕事だったそうだ。展示用の制作期間は1997年8月から1998年4月までで、展示期間は1998年4月22日から5月3日の仏誕日までの11日間であった。展示場は報恩寺の法王樓が中心となり、民族文化の継承発展という大きなスローガンを掲げていた。また、1999年5月22日には、電気燈・蠟燭燈等を始めて試作展示したり芸能人の公演会を実施したことがある¹⁴⁾。

韓国人が燈や誕生仏へする信仰心のほどを調べたつもりだった。それにいま現在もさまざまな形態への変更を試みている燃燈は現代韓国社会から漏れる風物詩だと思う。しかしそれが過去の系譜からかけ離れないまま進んでいるから、燃燈は確かに韓国人と仏神とを結んでくれる昔ながらの不変の媒介であることが判明されつつある。さて、このように燈から絶対的かつ宗教的靈験を求める発想は、仏誕儀礼から離れるのが許されるならば北韓社会においても認めなければなるまい。端的にいうならば、北韓でも社会や国の念願の究極の願懸けとして燈が盛んに利用されているからである。

北朝鮮社会科学院歴史研究所民俗学研究室が『民主朝鮮』の最近号に載せた記事によると、永生燈・忠誠燈を通しては金日成主席の永生と金正一総秘書への永遠なる忠誠を誓う念願が込められたという。韓国のような蓮花模様の燈ではなく、牡丹模様であることが特徴の一つである。ほかにも主体思想のための烽火燈があったり、1998年度の衛星発射成功の願懸けだといわれる強国燈があったりする¹⁵⁾。燈を制作する時期や願懸けの内容は異なっても南北韓ともに人々の献燈の信仰心の程度はほとんど変わらない。

とにかく以上調べてみたように、燃燈は韓国人の大小の願懸けはもちろん常に韓国仏教の発信の中心に存在してきたのはとても興味深い問題だと考えられる。さらにまた、韓国仏教のお祭り騒ぎの中心に仏像や仏具が重く位置付けられないのはどういうことだろうか。韓国仏教のみならず韓国民俗学に投げつけられた面白い課題かもしれない。近年、奉祝委員会からは‘赤子仏陀キャラクター’を開発して普及するのに大変骨を折っているようだが、これは全く現在の、それも奉祝委員会が一方向的に推し進めてできた風俗であるだけで、いまだ赤

子仏陀キャラクターと民俗文化との接触はあまりみあたらない。また、誕生したばかりの赤子シッダールタ像を祭っていわゆる浴仏儀礼を行う寺もあるがそれはあくまでも仏教儀礼の枠を越えてない。民俗文化との接触云々するのはまだ時期尚早なのである。したがって、仏誕習俗の形成と伝承の中心に燃燈が位置づけられるのは妥当かと思っている。具体的には、仏界からの神の降臨を韓国の民俗世界では燃燈をもって具現しようとしてきたのである。

さて仏誕習俗の形成に何故韓国では仏像とかではなく、燃燈が選択されたのかを考えてみたい。燈信仰の原点を探らなければならない所以である。

この問題を筆者は燈と神との関係、もしくは燈の迎神性や再生心意から考えてみたい。朝鮮時代の燈には中国の影響も多少みられるものの、伝来の信仰的かつ呪術的土台は古い。この土台こそ仏誕という外来文化との接触基盤であったに違いない。それで、伝来の燈信仰の研究もかなり蓄積されている実状である。いわば、韓国人は仏神以前からも、神と人間との交通手段として燈を盛んに用いてきたわけであるが、ここで言う神とはいうまでもなく天地神明・万神・先祖神などと呼ばれた伝来の神々を指す。それからこの神々の世界と人間の世界とは次のように言い分けるのが普通である。即ち、あの世とこの世・天と地・祖先と子孫・自然界と人間界などがそれで、その両界の媒介として燈や火が重要な役割を演じていたのは燈の神通力、つまり靈力を韓国人が信じていたからにほかならないという¹⁶⁾。燈や火の神通力は媒介に止まらず、不浄とか雑鬼、つまり邪悪な鬼神を祓ってくれたり、生命力を持続してくれる力が認められたという。こういう燈の民俗が土台になって冬至の火の民俗とか巫儀の締めくくりとしての焼紙、小正月の迎月の際の松明などの民俗が存続してきたという論理なのである。それで表仁柱は、燈や火の象徴をいわく、火＝日＝男＝陽＝生命力＝浄化及び辟邪力と図式化したことがある。冬至に火を点して太陽の衰弱を防ぎたいという心意、そして高麗時代に王権の強化策として冬至八閔会という燃燈行事を行なったりしたのも表の論理からすれば納得できる。

また、類似な別の説もあるが、韓国は古代から国家レベルで火種を大事にする習慣があったそれが国火と呼ばれる火種であったようだ¹⁷⁾。地上の絶対者が王者としての安定と国家の安定を図る際の絶対的かつ神秘的な力も実は国火で象徴された火種から得ようとしたのである。国火には神界に通じる神通力があると信じたからにほかならない。

このように燈民俗の土台は実は仏誕儀礼に限定する固定観念から離れるほど明らかになってくる。仏誕習俗もしくは仏教との接触以前の燈民俗の土台は私たちの予想を遙かに越えた領域で展開される場合が多いのである。

他にも仏教以前の燈民俗からその宗教性や呪術性を探するのは難しくない。太陰の満ちる小正月に陽気を補強するため松明を点す心意と陽気の衰残を防ぐために冬至の松明を点す心意とは表裏一体のようである。冬至と小正月を各々改年の境目として考えた所以なのである¹⁸⁾。それで、表仁柱の言う両世界の媒介や旧を改新するための点燈の心意が一番問われるのも実

は改年の時期であるので、燃燈民俗の着地も改年を中心に行われたと考えられよう。『三国史記』によれば、燈を点し看燈する儀礼が最初に登場するのも正月十五日であった¹⁹⁾。いわゆる正月燃燈の記録であるが、『高麗史』にも正月燃燈の記録は少なくない。これが、二月とか四月へ移り変わる問題については若干の研究もあった²⁰⁾。何よりも伝来の燈民俗と燃燈会や仏誕儀礼との接触問題については、洪淳昌の試金石のような研究があった²¹⁾。

ところで、燈の迎神性はそもそも仏誕に際して高く立てたと伝えられる燈竿からはっきりしてくる。昨今の仏誕日には境内を埋め尽くした数多い燃燈が風物のようにになっているものの、以前は燈竿が仏誕日の当たり前な民俗だったのである。燈竿を立てる理由は言うまでもなく降臨する誕生仏の標識にしたいという民俗論理からであって決して仏教論理では説明できない問題である。そして、燈の数も家族数と同じくしたりしたのもみな民俗論理がそこにある。燈竿民俗はさらに神竿民俗がその根源といわれるなか、近似民俗はいまも多く残っている。さらに、北青地方で灯籠や燈竿を立てて神を迎え祭ったという北韓民俗学者の報告によれば²²⁾、燈の迎神性は仏誕儀礼と接触するきっかけの一つになったのはほぼ間違いないと考えている。

仏誕日を迎えながら韓国人は燃燈に拘るといふか、つまり燃燈をもってシッダールタの降臨を具現する韓国型仏誕習俗の形成と伝承論理がそこにあったのではなからうか。

3. 日本の仏誕習俗と花

日本の仏誕習俗はまず言葉の面から他の国ぐにと区別される。花祭り・卯月八日・灌仏会などが主として登場する言葉であるが、昨今は花祭りとか降誕日・浴仏日等に絞られている。したがって、今の民俗語彙たる単語になるとどうも花祭りのほかにはほとんど一般には知られてないのが実状である。いずれにせよ、卯月八日においても卯の花の咲く旧四月の八日という意味をもっていたことから仏誕と花とは密接な関係にあることを窺わせる。それにいまはやっている花祭りという言葉からも分るように仏誕のことが花の民俗にリンクされていることはいうまでもないので、日本の仏誕儀礼はいま花を離れては考えられないほどである。

さて、仏教風という言葉のなかでは浴仏がかなり知られていると思うが、それは誕生したばかりのシッダールタの体を甘茶をもって洗ったという教学的な記録を日本の寺はかなり熱心に踏襲しているからであろう。少なくとも韓国仏教に比べたらそうである。それはお茶の生活文化とも絡まっている節があるが、ともかく日本の仏誕日には花とともに茶という二つのキーワードが重要な意味を持っていると考えている。しかし、いま民俗学の立場から仏教と民俗との接触を考えてみたら、やはり花という要素に集約せざるをえない。というのは、甘茶の流行っている裏面には寺の主観・判断、それとも境内に収斂された風物詩の一つといえるぐらいのものであるからだと考える。それに比べると花祭りが民俗語彙にまで定着したように、

仏誕と花との習合は境内に止まらず、家々や村落にまで及んでいたのはその意味することが大きい。

さて、最近の事情をいうと、ごく一部の事例を除いては仏誕日が境内に収斂されるのがほとんどである。したがって、韓国の仏誕儀礼と日本の仏誕儀礼との地域的位相からすると公平とはいえない。韓国の仏誕儀礼は地域住民が参加するケースが依然として根強く残っているので現在も市単位の行事が多い反面、日本の場合はほとんどの人々が知らぬまま仏誕日が過ぎてしまうのである。韓国が国家指定公休日になっているのも決して偶然ではなく昔ながらの伝統であるが、日本の場合は住職の主観に大部分が任せられている実状である。ひいては、仏誕儀礼を省略してしまうケースさえしばしばある。

日本の仏誕儀礼は縮小されたり、もしくは地域住民に知らせないケースさえたまにはあると言った。一方、一部の寺では一人でも多くの人々に参拝してもらうため仏誕儀礼の事実を積極的に広報する場合があるものの、全国的にみるとそんなに多くの寺とはいえない。そういう場合、テレビを通して寺の宣伝さえためらわない日本仏教の風土からみると仏誕儀礼のレクリエーション化を予想するのも難しくない。そういう場合、伝承文化の系譜を論ずるのはだんだんと困難にならざるを得ない。そして日本の寺で特筆すべきもう一つは、シッダールタの降誕より宗祖や寺の祖師の降誕日をいっそう大々的に慶祝するケースが目立つことだ。ということから、日本の住職らは仏誕日である旧暦四月初八日という日にちについてもあまり拘らないというか、決して慎重でもなさそうだ。それで旧暦四月初八日・新暦四月八日・新暦五月八日などその都度その都度の便宜によって選択されたりする。それは、日にちを寺の広報効果に結び付けて考えたり、ゴールデンウィークなどの社会的便宜に随いながら考えたりするからである。いま日本に降臨するシッダールタは日本人の功利性をまず窺わなければならない立場に置かれている。

当然ながら、日にちを一つに統一しなければならないという声も聞こえない。そして、全国の仏誕儀礼を掌る韓国の奉祝委員会のような機構も存在しないばかりか、全国規模でどうかしたいという声もいまだ聞こえない。したがって、未だ残っている仏誕儀礼も実は散発的かつ非持続的な場合が多いという事実をまず認めながら考究しなければならないと思っている。

このように均質でない両国の仏誕儀礼であるにもかかわらず、誕生仏の降臨を人々は具体的にどういう装置を借りて具現しようとしたのかという一点に絞って考えたいのが筆者の立場である。つまり誕生仏が降りる標として認識する人々の心意が問題なのである。

まず、東京都港区にある増上寺の場合は花祭りと灌仏会という二つの言葉をともに使っているが、花祭りのほうが圧倒的に多く使われる²³⁾。花祭りは新暦四月八日行われるが、前日の七日の夕方前夜祭を行うのが特徴である。満開した境内の桜の木に照明をあてながらのミニ音楽会を開催するなどレクリエーションめいたプログラムが用意されてある。音楽会は大正

大学音楽部の混声合唱団の協力を得て行う。前夜祭に入場する人々にはコーヒーと紅茶が振る舞われるなど和気藹々な雰囲気の中人々は続々と入場する。

さて当日の四月八日の花祭りであるが、花で飾られた誕生仏を甘茶で洗う浴仏儀礼があり、つづいて推薦によって甘茶か花、もしくは花種を配る。花祭りという名目で行われるレクレーションの一つなのである²⁴⁾。要するに、誕生仏を迎え祭る儀礼に根づいたはずの花のことがいま増上寺においては信仰心からというよりは娯楽心から貴ばれる感じさえする。以前ならその甘茶で書いた文字には虫除けや魔除けの不思議な力があると信じられるほどのものだった。

さて、前夜祭と本祭に分かれて行われるのは鹿児島県の宝満寺もそうである。1999年4月28日が前夜祭だったというから、宝満寺に降臨するシッダールタは4月29日を選ばなければならぬわけである。が、どうみても日にちが仏誕日とは何の関わりもない。ここで考えられるのは、1999年の場合5月1日(土)から5月5日(水、子供の日)までの5日間が連休であったということ、さらには4月29日(木、みどりのひ)からしますと1週間の連休があった点である。つまり、宝満寺では4月29日のみどりのひという国民の祝日の上に仏誕儀礼を便乗させるつもりだったのである。それで前夜祭を4月28日に行うことによってできれば多くの参拝客というか、お客さんに賑わってもらいたいという功利性が働いたに間違いのないだろうと思っている。一方、それにはまたお祭り騒ぎに盛り上げたいシャンシャン馬という祭りがあった。宝満寺の観音は妊婦の守護神として昔から有名で本祭の29日は花嫁を乗せたシャンシャン馬を先頭に稚児行列や白象、町内の踊り連など賑やかなパレードが続くわけである。この時期はゆでフカを酢みそで食べる風習もあるようだが、とにかくとも宝満寺の功利性はシッダールタの降臨する時期さえも変えてしまった²⁵⁾。

大阪の四天王寺の場合は新暦4月8日に灌仏会を行う。まず水盤に祀った誕生仏を花御堂という花亭に奉安する。そうすると人々は誕生仏に甘茶を注ぐ。さて、甘茶には誕生仏を洗った産湯がもつ神秘的な力があるといわれ人々に大事にされている²⁶⁾。墨を摺って虫除けとか書いた紙を貼っておけば効験があると信じられたり、甘茶を家の周囲に撒けば虫が近寄らないと信じられたりする俗信が伝わるほどである²⁷⁾。

また浄土宗では毎年、誕生仏を花で装飾することを人々に訴える。浄土宗でもやはり花は誕生仏の招代だという認識があるらしい。

この他にも長崎県本経寺は新暦4月8日釈尊誕生会、鹿児島県大国寺は新暦4月8日釈迦祭、山梨県久遠寺は新暦4月8日釈尊降誕会、大分県法心寺も新暦4月8日釈尊降誕会が各々開かれるが、どこの寺も旧暦の4月8日はあまり気にしてない。また栃木県竜泉寺は新暦5月8日に花祭りかまたは釈迦の誕生日からといって甘茶の振る舞いが行われる。横浜の円満寺も新暦4月8日花祭りを行っているが、甘茶の振る舞いにおいては大同小異であろう²⁸⁾。つまり、甘茶の振る舞いととも、甘茶の葉っぱとかその種を配るらしいが、参拝客の間も

そういう期待感が存在するのはいうまでもない。こういう風習は寺の灌仏会から派生された茶の文化の一つであり、花祭りとか花御堂とかの花とともに日本の現代の仏誕習俗をなす大事な要素なのである。

ところが、甘茶の面白い今の風習にもかかわらず、シッダールタという仏神を迎える招代、つまり標になれるのはやはり花に決まっている。

さて、日本の仏誕習俗において注目しなければならないもう一つは花の縛られた竹竿を高く立てる習俗の存在である。境内かその周辺では主に花御堂が見られたならば、花を縛った竹竿は韓国の燈竿と同じく民間で広く行われたという記録が多くみられる。要するに花竿と燈竿の同異が注目されるわけである。卯月八日という言葉が多く使われていたということはすでに述べたが、この言葉も実は卯の花が満開する時間に誕生仏が降臨することを伝える民俗レベルのメッセージだったのである。そしてこれは、日本の民間伝承が答えてくれる問題であるには間違い無い。仏誕日の前日花竿を立てて仏誕日の当日か翌日その花を捨てる地域が多かった。が、卯の花でなくても宜しかったらしく、藤の花か躑躅などもよく縛ったという。問題は仏誕を意識しながら花竿を立てる心意なのである。したがって、誕生仏のために竿の下には水や団子を備えることもあった。というのは、日本民俗では、仏神以外の例えば天神・太陽神・月神など他にも民俗レベルの様々な神々に対しても近似民俗が認められるからである。花とか水や団子などを供えるのは必ずしも仏教とは関係なく伝えられてきた根深い民間伝承なのである。そういう心意こそがいま日本の仏誕を語る以前の問題であると考え²⁹⁾。中でも特に天道花民俗は花竿に寄せていた日本人の民俗心意が幅広い所まで行き届いていたことを語ってくれるのである。

一方、仏誕を迎える習俗には花竿の他に、竹筒に花を生ける習俗も見逃すわけにはいかない。家族数の花を生けるらしく、これも誕生仏を迎え祝うためだといわれるなか7月までは何とかして花が萎れないように努める³⁰⁾。仏誕を迎え花竿を立てる習俗について宮本常一は、竿は神を招く標であり、花はそれを具体化するための表現だとした³¹⁾。つまり花は誕生仏の招代だという認識があったものである。したがって人々は竿は高ければ高いほど良いものとした。できればその竿が天竺まで伸びることを祈ったりもしたが、それも確実に釈迦神が乗移ってほしいという人々の切実なる念願だったのである。

一方、五来重がいうには、竿に花を縛る行為には仏神だけでなく先祖の霊を迎え祀りたいという心意も存在すると主張した³²⁾。花を祖霊の依代とする民俗が多数報告されているのが根拠である。竿の花にまつわる俗信も実に多いが、それも山岳信仰などの日本伝来の民間信仰に起因することが多いのである。

こうしてみると、仏誕を迎え花の竿を高く立てる民間伝承は仏誕と日本伝来の迎神習俗とが習合してから生れた民俗であることが判明できたのである。外来神である仏神は日本に伝来されながら、日本伝来の竿の民俗とか花の民俗の上に乗乗する習合の方法を採用したの

である。そしてこういう習合の便乗方法こそ、現代化した寺の境内で行われる昨今の花祭りの中に隠されたいわゆる仏誕習俗の日本型ではないかと考えている。

4. まとめ

この小論はお釈迦さまの降誕日といわれる昨今の旧暦四月初八日に韓国と日本では各々どういうことが行われているのかを比較し、その差異を究明するのが目的であった。韓国と日本は同一仏教文化圏にあるという共通点の他にも近似民俗の多数を共有する数少ない関係にある。にもかかわらず、仏誕儀礼の土着化—*localization*—となると、その受容の仕方とか土台文化の異なる対応により、それぞれ異なったお釈迦様の誕生日を迎えているのが事実である。

お釈迦様の誕生日はそういう面で特に有効な比較基準だと考えたつもりであり、ここで燈と花は重要なキーワードだった。ところで燈と花にまつわる民俗は実は韓国と日本どちらにも存在する。しかし韓国の仏誕儀礼は特に燈の民俗と習合した形で、そして日本のそれは花の民俗と習合した形で伝えられていたのが目立つだけなのである。韓国の仏誕儀礼にも花の存在感は認められるもののやはり燈の位相とは一線を画し、また日本にも燈の民俗は存在するもののそれは仏誕儀礼よりはお盆との習合が目立って多かったわけである。つまり、誕生仏を迎え祀る標として韓国では燈が日本では花が各々選択されたと考えられる。

そして、そういう選択面での相違は各自の異なった伝来の迎神習俗が習合の土台だったからであると判断した。要するに、原因は外からではなく、土着文化に内在されていたのである。こういう原因提供の発見は仏教民俗を研究する目的の一つであろう。

誕生仏を迎え祀る標という文化要素でありながら一つの比較基準に絞って考えた場合以上の比較分析は可能だったと思う。灌仏とか浴仏とかよばれる問題のなかでのシッタータの産湯、つまり甘茶というもう一つ仏誕儀礼をなす要素については今後の課題にしたいと思っている。

注

- 1) 藤井正雄「比較仏教民俗学覚え書き」『日本民俗の伝統と創造』弘文堂、1988、p. 237.
- 2) 崔仁鶴「未来を志向する比較民俗学」『比較民俗研究』筑波大学比較民俗研究会、1994、p. 2.
- 3) 片茂永『韓国仏教民俗論』民俗苑、1998.
- 4) 『現代仏教』74号、1996.
- 5) www.buddhism.or.kr/event
- 6) 『曹溪新聞』97号、1993.
- 7) www.metro.seoul.kr/kor/administration/index.html
- 8) 『無等日報』1999年5月17日付。

- 9) www.chejunews.co.kr/1998/05/19980501/
- 10) 『現代仏教』 171号, 1998.
- 11) 『仁川日報』 1999年4月24日付。
- 12) www.buddhism.or.kr/event
- 13) Buddhapia.com の鄭成雲記者と1999年度奉祝委員会執行委員長との面談結果の報告である。『現代仏教』 221号。
- 14) www.buddhapia.com/buddhapi/news/event/bongchuk/bong2543
- 15) [//dailynews.yahoo.co.kr/headlines/politics/19990518/yonhap/926994295.html](http://dailynews.yahoo.co.kr/headlines/politics/19990518/yonhap/926994295.html)
- 16) 表仁柱「小正月民俗における迎月の考察」『比較民俗学』13, (韓国)比較民俗学会, 1996, p. 454.
- 17) 崔熙秀「隧神考」『韓国民俗学報』3, 韓国民俗学会, 1994, p. 246.
- 18) 金宅圭『韓国農耕歳時の研究』嶺南大学校出版部, 1991, p. 190.
- 19) 『三国史記』 卷11, 新羅本紀景文王六年。
- 20) 前掲3。
- 21) 洪淳昌「燃燈考一特に上元燃燈について」『金載元博士回甲記念論叢』乙西文化社, 1969.
- 22) 金浩燮「中世燈民俗に関する研究」『歴史科学』112, 平壤科学百科事典出版社, 1984, p. 44.
- 23) 1999年2月13日, 増上寺寺務所の赤羽氏との電話インタビューによる。
- 24) www.jin-japan.org/kidsweb/calendar/april/kambutsue.html
- 25) www.synapse.ne.jp/hibushi/ivent.html
- 26) www.tourism.city.osaka.jp/kiss/owa/
- 27) 伊藤唯真「灌仏会と供花」『仏教民俗学大系』6, 名著出版, 1986.
- 28) 以上の若干の資料はほとんど1999年5月30日現在, yahoo japanを通して検索可能な資料であった。これが全てとはとうてい言いえないが, でもある程度の尺度にはなれると思う。
- 29) 伊藤唯真「卯月八日の民俗と仏教」『日本民俗学』128, 日本民俗学会, 1980.
- 30) 柳田国男『歳時習俗語彙』国書刊行会, 1975, p. 416.
- 31) 宮本常一「民間習俗」『年中行事絵巻』解説。
- 32) 五来重『続仏教と民俗』角川書店, 1979, p. 174.